サービスラーニングを通して

活動先：NPO 法人　もやい

１．自分の成長と気付き

私はもやいで活動させていただいて、子どもたちと主に関わった。障害児の預かり保育をした際には、ダウン症の弟と健常児の兄という兄弟と出会った。私はお兄ちゃんの方と遊んでいたのだが、弟がちょっかいをかけてきてお兄ちゃんの作ったレゴのおもちやを壊してしまった。しかしお兄ちゃんは怒らず黙ってまたおもちゃを作り始めた。その後も何度もおもちゃを壊されたり倒されたりしたが、お兄ちゃんは一度も怒ることはなかった。この光景を見て、兄は幼いのに弟のことをちゃんと理解しているのだと感じた。しかしそれと同時に､兄の方で我慢していること､辛いこともたくさんあるのではないかと思った。また、弟は少し奇抜な髪形をしているのに対し、兄は坊主だったので、両親が何を思ってそうしたのかという点についても考えさせられた。

夏休み中の小学生と関わった際には、子どもたちは大人のことをよく見ていることに気付いた。小学校低学年ではあるが、人の感情を読み取ったり細かいことをよく見ていたりという点については、幼い、幼くないなどは関係ないのだと感じた。活動中に一番困ったことは、子どもに対しての叱り方がわからなかったことであり、それはグループ全体の課題となった。叱ってもすぐに同じことをしたり、笑って聞いてくれなかったりして、どうやったら上手に叱ることができるのかとても悩んだ。

もやいでは、ガーゼ染めやお茶会など、普段の生活ではなかなかできない貴重な体験をたくさんさせていただいた。ガーゼ染めでは、私たちの染めたガーゼがスカーフやハンカチとなってバザーなどで販売されたのだが、ほんの少しの染めむらで、商品価値がぐんと下がることを知り、一つの商品を完成させることの大変さを実感した。夏休みの最後に職員さんや子どもたちと行ったバーベキューや天体観測はとても印象に残っている。天体観測に関しては科学館に交渉し、ボランティアさんに来てもらうところまで、全て自分たちで準備したのだが、これによって私たちの責任感が強くなったと感じている。

初めは何事にも消極的で、進んで何かをするということができなかったが、もやいで職員の方たちや利用者さんたちとふれ合っていく中で、少しずつ自分の中に吸収されていくものが多くなっていったように思う。事前打ち合わせを十分に行わなかった、グループ内での連携がとれていなかった、自分たちの都合を優先させがちだったなど、反省点がたくさん出た結果となったが、活動自体は大変充実していた。また、活動の中で私は、“してあげるのではなくさせていただいている”という気持ちを常に持って活動しなければならないことを学んだ。子どもとの向き合い方に悩んだり、うまくコミュニケーションがとれずに悔しい思いもしたけれど、もやいでの活動は毎日が発見の連続で、それに感動したり驚いたりつまずいたり考えたりすることで、自分自身が活動前よりも成長できたという実感が持てた。もやいでした数々の経験は自分にとって一生の財産になり、いい思い出になったので、それをこれからの生活に少しでも活かしていけるように頑張りたい。グループの

みんなやもやいの方々には心から感謝している。

２．活動を通して見えてきた地域活動や社会課題

活動を通して、もやいでは次世代を担う子どもたちの支援に力を入れていこうとしていることがわかった。しかし子どもたちと関われば関わるほど、子どもたちのマナーやルールに対する考え方に課題があることがわかった。この問題を解決するためには、もはや家庭内での親のしつけだけでなく、地域全体で支えていく必要があると思う。子育てもそうだが、親育てにも重点を置いていくべきという見解から、子どもを持つ親を対象にしたセミナーなどの開催を行うといいと思う。また、子どもと向き合うというのは簡単なことではないので、まずは私たち大人が子どものことを理解するためにも、子どもの心理などを学ぶべきだ。そのためにもやはりさまざまな講習会を開くとよいと考えるのだが、その際の費用についても検討しなければならないので、簡単に実現はできないはずだ。もやいでは、子どもの他にも、高齢者の方たちがデイサービスを利用していたのだが、子どもたちと別々の部屋を利用していたので、子どもと高齢者が共にふれ合う機会を提供すれば、異世代交流ができるし、子どもたちも人を思いやる心が強くなってよいと思う。私も実際、幼稚園の時に福祉施設で踊りを披露して高齢者の方たちとふれ合った経験があり、その時のことを今でも覚えていて、いい思い出になっている。そういった経験をすることで、子どもも高齢者もお互いにいい刺激を与えられると私は考えている。